

平成21年6月10日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19530434

研究課題名（和文） ライフイベントデータの収集と分析に関する研究

研究課題名（英文） Research on collection and analysis of life event data

研究代表者

渡邊 勉 (WATANABE TSUTOMU)

関西学院大学・社会学部・教授

研究者番号：30261564

研究成果の概要：本研究では第一に、ライフヒストリーデータ収集、作成の方法を検討し、インターネットを通じた夫婦ペアのパイロット調査を実施した。調査から、インターネットを利用したライフヒストリー調査の利点と欠点を明らかにした。第二に調査データを用いて、ペアデータの分析およびライフコースデータの分析の両面をおこなった。分析から、夫婦ペアのライフコース、意識、行動、関係の相違と一致、影響について、いくつかの分析手法を用いて、分析を試みた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：ライフヒストリー、インターネット調査、系列分析

1. 研究開始当初の背景

- (1) 研究代表者は、これまで職業経歴研究をおこなってきており、ライフヒストリー研究が、近年家族研究、社会階層研究において、活発におこなわれている現状に注目してきた。
- (2) ライフヒストリーは、それぞれのライフイベントの順序や関係だけでなく、そうしたライフイベントによって生じる社会関係の変化（ソーシャルサポートなど）も重要な要素である。
- (3) しかし、ライフヒストリーデータの複雑

性を分析できる手法は、現在ほとんど開発されていない。

- (4) 一方、社会関係の分析においては社会関係資本研究や社会ネットワーク研究等を中心とした社会ネットワーク分析が、また時系列データの分析においてはイベントヒストリー分析や最適マッチング分析等がおこなわれている。
- (5) しかし社会関係の変化とライフイベントの関係については、分析手法がこれまでほとんど存在せず、それゆえほとんど研究がなされていないのが現状であり、新

しい分析手法の開発が必要である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「ライフヒストリーデータの調査・分析手法の開発」にある。具体的には、次の4つの目的から構成される。

- (1) ライフヒストリーデータ作成方法の検討。
人間関係の変化を含んだ、定型的なライフヒストリーデータの作成方法、データ形式を検討する。最も望ましいデータ収集方法は、パネル調査による追跡調査であるが、人的、金銭的、時間的にもコストが膨大にかかるため、調査を実現することは難しい。それに対して回顧的にデータを収集することは、パネル調査に比べると容易である。それゆえ、回顧的にライフヒストリーデータを収集する方法や形式の検討が必要である。
- (2) 社会ネットワーク分析、系列データ分析の接合の可能性の探求。
人間関係の情報を含んだ系列データを分析するために、社会ネットワーク分析と系列データ分析を結合した分析手法を開発する。現時点では、具体的に最適マッチング分析に代表されるパターン指向型分析法と社会ネットワーク分析の分析結果をブール代数分析によってつなぐことによりライフイベントパターンの変化と社会関係の変化の関係を明らかにしていく。
- (3) ライフヒストリーデータの分析。
 - (1) (2) から、ライフヒストリーデータを実際に計量的に分析し、従来の研究で明らかにできなかった課題にどのように答えられるかを検討する。
- (4) 他領域への応用可能性の探求。
本研究で提示される新しい分析手法が他の社会的データ（経歴データ、歴史データ等）にどのように応用可能なかを検討する。

3. 研究の方法

本研究は、2年間の研究においてライフヒストリーデータのデータ収集方法の検討と、データ分析法の開発の両面から、ライフヒストリーデータを実際に収集、分析し、新しい分析の可能性を探る。

- (1) ライフヒストリーデータの収集方法について、これまで国内外で実施されてきたライフヒストリー調査を検討し、新しいライフヒストリー調査の可能性を探る。
- (2) (1)に基づき、インターネットを利用したライフヒストリーに関するパイロット調査を実施する。
- (3) (2)で得たデータを加工し、ライフヒストリー、時系列データの新しい分析の方法について検討し、実際に試行錯誤的なデ

ータ分析をおこなっていく。

- (4) (3)の分析結果から、データ分析を通じてどのような知見が得られ、またデータ収集方法と分析方法にどのような課題があり、さらに今後他領域にどのように応用可能であるかを検討する。

4. 研究成果

- (1) 系列データ分析の検討。
最適マッチング分析を中心に系列データ分析の方法の可能性について検討した。最適マッチング分析は、ライフヒストリーを縮約し、パターンを抽出する方法として有効な分析手法であるが、ライフヒストリーの特徴を十分かつ確実に捉えることができない。そのため、データを丹念に記述していく方が、パターンははっきりと見えてくる場合があることを確認した。またネットワーク分析やブール代数分析との結合の可能性については、試行錯誤的な分析を試み、可能性を見出すことはできたが、分析手法の有機的な結合については、検討の途上にあり、今後の課題である。
- (2) ライフヒストリーデータ収集のためのパイロット調査の実施。
ライフヒストリーに関するインターネット調査を国内では初めて試験的におこなった。インターネット調査のモニターを対象に、まず調査に協力してもらえる夫婦を募集した。その後、協力意志のある夫婦100組に対してメールにて調査票ファイルを送付し、書き込んで、送り返してもらうという調査方法を採用した。具体的には、MS-Excelファイルで調査票を作成し、回答者にはMs-Excel上に回答を入力してもらうこととした。Excelファイルの調査項目は、ライフヒストリーに関する項目（仕事の内容など自由回答の部分と地域や学歴など選択肢による回答の部分によって構成される）、夫婦間の関係に関する項目、家族内の関係の変化に関する項目などが含まれる。
- (3) パイロット調査からの知見。
 - (2)より、これまで面接調査でしかできなかったライフヒストリー調査を、インターネットを媒介とした調査の実現可能性を示すことができた。
ライフヒストリー調査は、多様で複雑な人生を聞き取る調査であるため、従来面接調査によってしか、おこなうことが難しかった。自記式の課題は、①複雑なライフヒストリーに関する質問文をいかにして単純化し、回答者にわかりやすく提示するか、②過去のライフイベントについて回顧してもらうため、不確かな情報をいかにして整合的に想起してもらう

かである。今回のパイロット調査では、できるだけワンクリックで容易に回答できる項目を増やすことで、調査に容易に答えられるように工夫した。パソコンに習熟した世代にとっては、入力も通常の自記式調査、面接調査よりも容易であった。逆に高齢世代にとっては、負担がさらに大きくなってしまったという課題も残った。また Excel ファイルに入力する形式としたので、論理的な誤りは、回答者が入力する時点で、チェックすることができ、精度の高い調査データを得ることができた。また入力をファイル上でおこなうことで、データ化も容易におこなうことができた。

ただその一方で、今回の調査ではいくつかの不備、課題もあった。第 1 に、入力の難しさである。入力の単純化、容易化に関してさまざまな工夫をおこなったが、十分とは言えなかった。当初調査は、カレンダー形式の予定であったが、事情により、通常の調査票の形式となった。そのため、さまざまなライフイベントを関連づけることで記憶を想起するという調査にはなっておらず、ライフストーリーの想起が難しくなってしまった。第 2 に、質問項目が多かったため、縦スクロールだけではなく、横スクロールもしなければ回答できず、やや回答しづらいものとなってしまった。第 3 に、ライフストーリーに関する詳細な質問をしたため、心的負担が大きく、回答者に忌避感も招いてしまった。自由回答欄の内容を分析したところ、回答に数時間を必要とした回答者もあり、回答のコストが大きかった。それゆえ第 4 に、全体の回収率が低くなってしまった。もともと回答の意思がある夫婦にのみ調査をお願いしたはずであったにもかかわらず、予備サンプルを使っても、7 割程度の回収しか得られなかった。つまり調査に協力するつもりは当初あったが、調査票を見て、回答を断ったケースが多数あった。

(4) パイロット調査データの分析 1。

(2) で得られたデータは、夫婦ペアのデータであった。それゆえまず夫婦の間のライフコースの影響関係、関連を検討した。第 1 に職歴パターンの夫婦による相違を概観した。その結果、従来通り、夫（男性）は、転職が少なく、女性は結婚あるいは出産を機に退職する傾向があることを確認した。夫婦ペアで見たとき、結婚前は夫婦共に働いているが、結婚とともに一方が退職し、その後数年後にまた 2 人が働き始めるというパターンが多い。こうしたパターンを図式化することによって直感的にわかりやすい表現にし

た。第 2 に、若い世代では転職が夫婦ともにやや多く、高齢世代は転職が少ない。転職率は、女性において M 字型就労に近いカーブを描いた。これらの結果は、通常いわれている知見を追認する形となったが、夫婦ペアのデータからこうした検討も日本ではおこなわれておらず、新しい試みであった。ただ当初研究課題として新しい分析手法の開発や分析にまでは至っておらず、試行錯誤的にさまざまな分析を試みるにとどまっており、今後の課題である。

(5) パイロット調査データの分析 2。

ライフコースと意識、夫婦の関係について検討し、夫婦間の相違、一致の程度について明らかにした。世代に関係なく夫の職歴はライフコースの影響を受けにくいのに対して、妻は受けやすい。また意識については、夫婦で相違がある部分と一致する部分があることが明らかとなった。ただ意識、社会（夫婦）関係とライフコースの関係については、これまではっきりした関連が見えてきていない。本当に関係がないのかどうかについては、今後の課題である。

(6) パイロット調査分析の可能性。

以上のパイロット調査の実施、分析を通じて、今後の可能性として以下のような点を指摘できる。

① データ作成の方法。

今回の研究では、データの作成方法について検討した。通常の調査票形式により得られたライフストーリーデータをカレンダー形式に変換、さらに夫と妻が対応するようにする。カレンダー上では、さまざまなライフイベントを同時に見ることができ、その関連を見ていくことができる。一人 1 シートのカレンダーを作成する。実際の分析においては、それぞれのシートから必要な情報を選択し、新たなデータを作成する必要がある。今回の研究では、その作業が繁雑であり、データ分析に至るまでの作業が大きかった。そのために、データを自動的に抽出するプログラムの作成、データの加工方法についての検討が課題である。

② データ収集の方法。

今回のパイロット調査では、通常の調査票調査の形式を採用した。つまり、学校卒業、就職、結婚、出産等、ライフイベントについて、SSM 調査、NFRJ 調査、JGSS 調査などと同様、別個に尋ねていった。それゆえ、就職と結婚、出産など複数のイベント間の関連を回答者は想起しにくかった。

それゆえ、今後はカレンダー形式の調査を行う必要があると考えられる。しか

し、前述したように、そもそも回答者の回答の負担が大きい。それを軽減するためには、コンピュータをいかにして利用し、回答者の負担を軽減するかを考える必要がある。またライフヒストリーの全体を詳細に尋ねるのではなく、調査目的をはっきりさせた上である程度しぼった調査をおこなっていく必要がある。

(7) 系列分析の可能性

ライフコースのパターンを探る系列データの分析方法について、現在のところ万能な分析手法はない。それゆえ、分析目的に照らして有効な分析手法を探っていく必要がある。最適マッチング分析、ネットワーク分析、時系列データ分析は有効な方法ではあるが、それぞれの分析手法には長短があり、単独に利用しても、ライフヒストリーの特徴を十分に取り出すことができない。これらの分析手法をどのように組み合わせ、ライフヒストリー全体の特徴を取り出すかが、今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ①渡邊勉、インターネット調査によるライフヒストリーデータの収集方法、関西学院大学社会学部紀要、107、113-124 頁、2009年、査読無
- ②渡邊勉、夫婦ペアデータの特性、関西学院大学先端社会研究所紀要、1、99-109 頁、2009年、査読無
- ③渡邊勉、地方国立大学卒業生の職業経歴、人文科学論集 (人間情報学科編)、83-105 頁、2008年、査読有
- ④渡邊勉、男女差からみた転職のパターン分析、世代間移動と世代内移動、257-278 頁、2008年、査読無
- ⑤渡邊勉、職業の特徴と職業ネットワーク、階層・階級構造と地位達成、37-61 頁、2008年、査読無

6. 研究組織

(1)研究代表者

渡邊 勉 (WATANABE TSUTOMU)
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：30261564

(2)研究分担者

(3)連携研究者